

中原中也の身体意識 (3)

— 未刊詩篇をめぐって —

(一)

私はこれまで中原中也の自選詩集『山羊の歌』『在りし日の歌』にあらわれた身体語を分析することによって、中原の身体意識や生命観をさぐってきた⁽¹⁾⁽²⁾。この場合、自選詩集にでてくる作品に限定することなく、全集の未刊詩篇の作品をも適宜とりあげて中原の内面にせまることを試みた。そのときに感じたことは、自選詩集よりも未刊詩篇において、詩人の内面がより深く表現されていることが多いということであった。自選詩集にのせられた作品は、それまで書きためていたものや雑誌に発表したものの中からすぐれていると判定されたものが選ばれると思われるが、判定の規準は必ずしも作品としての出来ばえだけではあるまい。自分が隠しておきたい「暗部」が表現されている作品はすてられると考えられる。いわば、「自己検閲」が働くわけで、このフルイにかけられ自選詩集からもれた作品に、作者の内面がより深くあらわれているのは当然といえる。精神分析の言葉を借りると、自選詩集が「意識」にあたることすれば、未刊詩篇は「前意識」や「無意識」にあたる。これを氷山にたとえると、海面に頭をだしてい

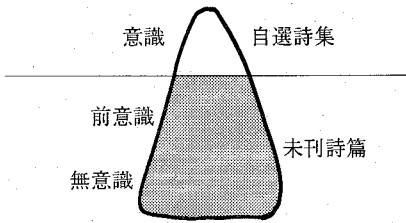


図1 自選詩集と未刊詩篇の関係

る「意識」の下部に、広大な「前意識」や「無意識」の部分があるのである。(図一)。

さて、自選詩集の『山羊の歌』『在りし日の歌』には、合計一〇二篇の詩がのせられているが、角川版全集にでてくる未刊詩篇の総数は二四六篇である。これを同全集では、次の五つの時期にわけている。

- ① 一九二三年—一九二八年 (十六歳—二十一歳) : 七十二篇
- ② 一九二八年—一九二九年 (二十一歳—二十二歳) : 十五篇
- ③ 一九三〇年—一九三二年 (二十三歳—二十五歳) : 五二篇
- ④ 一九三三年—一九三四年 (二十六歳—二十七歳) : 四八篇
- ⑤ 一九三五年—一九三七年 (二十八歳—三十歳) : 五九篇

このうち、①の時期の大半は、ダダイストを自称していた習作時代であり、以後の時期の作品とは区別することができる(この時期に書かれた作品で、自選詩集におさめられたのは「春の日の夕暮」「朝の歌」「臨終」の三篇だけである)。

本稿では、前稿に続き、詩の中に出現する身体語をとおして、ダダイスト時代の作品を分析し、さらに、自選詩集と未刊詩篇の比較をすることを試みる。

(二)

表一から表五に、前述の①から⑤の時期の未刊詩篇にあらわれた身体

表2 「未刊新篇(1928年—1929年)」(15篇)の身体語

眼(4) 〔目(3)〕
涙(3)
胸(2)
耳(2)
フケ(2)
骨
肉
身
合計 19
19/15=1.3

表1 「未刊詩篇(1923年—1928年)」(72篇)の身体語 ()内は例数。数字のないのは1例である。

胸(14)	涙(3) 〔涙腺(2)〕	頭
足(9) 〔膝(3)、脚(2)、 立て膝(2)、ひざ、 膝頭〕	口角(3) 〔口腔(2)、口〕	歯
顔(8) 〔笑顔、顔付〕	肩(2)	腰
目(4) 〔眼(4)、眼、まな こ、眼窩、瞼、眼 瞼、網膜、眉毛〕	背(2)	腹 〔お腹〕
額(4)	胃(2) 〔胃病〕	へソ
腕(4)	皮(2) 〔横皺〕	尻
手(3) 〔右手(2)、両手、 手付、母指〕	舌(2)	不随意筋
	唾液(2) 〔生唾液〕	腓腸筋
	血漿(2)	体
	頭 〔頭髮〕	身
		合計 114
		114/72=1.6

表4 「未刊詩篇(1933年—1934年)」(48篇)の身体語

血(13) 〔鼻血〕	唾(2) 〔生唾液〕
涙(6)	胃(2)
手(6) 〔手の掌〕	背中
身(5)	肩
目(5) 〔目付(2)、眼、眼、 眼瞼、瞳〕	肘
口(4) 〔唇(3)、唇、唇、口 付、舌〕	腰
首(3) 〔頸(3)、頸〕	〔柳腰〕
胸(3)	歯
顔(3)	〔菌茎〕
耳(3)	爪
足(2) 〔脛(2)、腓、ふくら はぎ、腓〕	臍
	皮
	絨毛
	施毛
	汗
	合計 95
	95/48=2.0

表3 「未刊詩篇(1930年—1932年)」(52篇)の身体語

身(7)	〔歯、前歯〕
眼(6) 〔目(4)、瞳(2)、眼、 目付〕	背中
顔(6) 〔横顔〕	背
頭(5)	頬 〔頬肘〕
額(5)	頸 〔髮毛〕
手(4)	耳
涙(4)	鬚
鼻(4) 〔漢〕	肌 〔肌へ〕
胸(3)	汗
足(2) 〔片足、脚、膝〕	腎臓
くちびる(2) 〔唇、唇、口、舌〕	胃袋
涎(2) 〔唾〕	筋骨
齒槽膿漏(2)	結締組織
	合計 88
	88/52=1.7

表5 「未刊詩篇 (1935年-1937年)」
(59篇) の身体語

顔(9) 〔顔付、横顔、 ^{かほ} 貌、オ カホ〕	胸(2) 血(2) 〔血液型(4)、 ^{ふるち} 老 ^ち 衰 ^ち 血〕
手(5) 〔 ^{てのひら} 掌、 ^{かひな} 腕、腕、かひな〕	^{からだ} 肉体(2) 〔肉体〕
涙(4)	髪毛(2)
目(4) 〔 ^{まなこ} 瞳(2)、眼〕	腹
身(3)	足
耳(3)	頸
肩(3)	後頭
唾液(3) 〔 ^{つば} 唾(3)〕	鼻腔
口(2) 〔唇、口唇、喀痰〕	肌へ
	合計 73 73/59=1.2

語をリストアップした。ここで身体語というのは、前稿と同じく、身体部位の名(「血」とか「身」を含む)、身体部位名を含んだ表現(例えば「立て膝」)並びに分泌物の名(「涙」「唾液」など)である。動物に関するものは除いた。参考のために、『山羊の歌』の身体語を表六に、『在りし日の歌』のそれを表七に示した。語は頻度の順に並べた。「」内は関連した語である。

まず、一篇あたりの身体語の数をみると、未刊詩篇の場合一・二から二・〇の間に分布しており、自選詩集の場合(二・〇と二・三)よりやや少ない。このことにとどのような意味があるのか、さらに意味があるとするればそれが何なのか、うまい解釈がうかばない。単に数字をあげるにとどめておく。

次に、習作期ともいえる一九二三年-一九二八年(十六歳-二十一歳)の時期の特徴をみてる。表一からわかるように、第一位は「胸」であ

表7 『在りし日の歌』 (58篇) の身体語

手(10) 〔手真似(2)、 ^て 手 ^{ゆぢ} 握手(2)、 ^{てのひら} 手 頸、手中、手 付き〕	汗(3)	背中
胸(7) 〔胸乳〕	面(2)	指先
頭(6)	頸(2) 〔 ^{うなじ} 頸条〕	ひ臍
瞳(6)	肩(2)	足 〔 ^{はだか} 裸足〕
身(6)	涙(2)	膝
眼(5) 〔 ^{まなこ} 眼(2)、眼付 (2)、目、眼玉、 近眼、 ^{まぶた} 瞼〕	唇(2) 〔 ^{くちびる} くちびる、 ^{つげ} 接 唇〕	尻
腰(5)	耳	心臓
骨(5)	頬 〔 ^{おほこ} 頬、 ^{あご} 顎〕	胃袋
顔(4) 〔笑顔〕	舌	肺病
額(3)	歯	からだ
	髪 〔黒髪、髪毛〕	肉
	^{こゝろ} 首 咽喉	肌 〔 ^{はだ} 肌〕
		白血球
		合計 116 116/58=2.0

表6 『山羊の歌』 (44篇) の身体語

手(13)	唇 〔 ^{くち} 唇、 ^{くちびる} 唇〕
涙(8)	顎
胸(8)	頬 〔 ^{おほこ} 頬、 ^{あご} 顎〕
目(7) 〔 ^{まなこ} 眼(3)、眼(3)、 瞳(2)、目玉〕	咽喉
腕(7) 〔 ^{かひな} 腕〕	鼻 〔鼻汁〕
血(6) 〔血管、静脈管〕	歯 〔 ^{こがし} 歯、 ^{こがし} 拳〕
頭(5)	猫背
口(3)	上肢
顔(2)	腰 〔 ^{こし} 腰、 ^{あし} 脛〕
額(2) 〔 ^{ぬか} 額〕	〔足竝、趾頭〕
頸(2) 〔 ^{うなじ} 頸、頸すじ〕	皮膚
髪 〔 ^{かみ} 髪毛、 ^{しろが} 白髪〕	身 〔 ^{からだ} 身、 ^{しん} 肉〕
耳 〔 ^{みみ} 耳、 ^{みみ} 耳朧〕	合計 102 102/44=2.3

る。「胸」が第一位というのは他の時期にはみられないが、『山羊の歌』(表六)では第三位、『在りし日の歌』(表七)では第二位といずれも多く出現しているので、この時期の身体語の特徴を示すものとはいえないと思う。この時期の特徴は、「足」(およびその関連語)が著しく多いことである。表二から表七をみても、「足」やその関連語は非常に少ないからである。とすると、十代の後半から二十代のはじめごろの中原は「足」に強い関心があったということになる。これを裏付けるような作品が「ノート1924」と呼ばれている詩帖にある(以下、引用は角川版全集による。ただし、漢字は新字体に改め、編者によるルビは省略した。引用箇所には付した傍点は、ことわりのない限り吉竹。)

自滅

親の手紙が泡吹いた

恋は空みた肩揺つた

俺は灰色のステッキを呑んだ

足 足

足 足

足 足

足

万年筆の徒歩旅行

電信棒よ御辞儀しろ

お腹の皮がカシヤカシヤする

脛の下から右手みた

一切合切みんな下駄

フイゴよフイゴよ口をきけ
土橋の上で胸打つた
ヒネモノだからおまけ致します

この詩で「足」という字を並べた部分は、同じ「ノート1924」にある「倦怠に握られた男」の

俺は、俺の脚だけはなして、
脚だけ歩くのをみてゐよう――

を目にみえるような形であらわしたものと考えてよいだろう⁽³⁾。中原のダダの詩の中で、この詩は多くの評者の関心をひいている。北川透⁽⁴⁾は、「脚だけで歩くというような夢想においてこそ、中原は、現実や現象界より自由になり、また、ことばの意味の規範から解放される契機をもったと考えることができる。そしてそれが中原のダダの方法だった。」とのべている。また、佐々木幹郎⁽⁵⁾は、「自分の身体から「脚」だけを離して、それが歩くのをみてみようというのは、中原の郷里からの解放感をあらわしているのだ。」とのべている。しかし、私はもともと素直に、身体感覚の異常、足が自分の体から離れて歩いていくように感じるという「異常体感」(セネストパチー、cénesthopathie)を表現したものと考えたい。吉松和哉⁽⁶⁾は「セネストパチーでは、身体のある部分が異物化し、身体に分裂がおこっている。そして、その部分がそれ自体の独自性をもつようになり、自己はこれに対してその統合の力がいかんとも及び難い。」とのべているが、この詩はまさにこのような状態を記述したものと読みとれるのである。また、小波藏安勝⁽⁷⁾は、青春期の精神分裂病患者にみられる異常体感の症状として

「上半身と下半身の分離感」

「手足がバラバラになる」

「体がバラバラにこわれそう」

「自分の足ではあるが心とは別の方に歩いていく」

等をあげている。この中の最後の症状と前述の詩はよく似ている。また、「体がバラバラにこわれそう」という症状によく似た表現が、未刊詩篇の「(秋の夜に)」(一九三〇年—一九三二年の間に書かれたと推定される「早大ノート」という詩帖にでている)の中にある。

秋の夜に、

僕は僕が破裂する夢を見て目が醒めた。

人類の背後には、はや暗雲が密集してある
多くの人はまだそのことに気が付かぬ

気が付いた所で、格別様様のことが出来だすわけではないのだが、
気が付かれたら、諸君ももっと病的になられるであろう。

デカダン、サンボリズム、キュビズム、未來派、
表現派、ダダイスム、スュルレアリスム、共同製作……

世界は、呻き、躊躇し、萎み、
牛肉のやうな色をしてゐる。

然るに、今病的である者こそは、
現実を知つてゐるように私には思へる。

健全とははや出来たての銅鑪、

なんとも淋しい秋の夜です。

この詩は、今問題にしている時期より少しあとのものであるが、「僕が破裂する」というのは「体がバラバラになる」という異常体感の症状とそっくりである。また、このあとには「人類の背後には、はや暗雲が密集してゐる」という表現があり、分裂病者の「世界没落感」をおもわせる。ただ、「僕が破裂する」というのは「夢」の中のことになつているので、実際の異常体感とはちがうという解釈もできる。そうすると、前述の「足」の異常体感をおもわせる詩も、夢の中のことかもしれない。実際、中原の詩で「夢」という言葉のでてくる作品をみると

夢の中で、彼女の臍は、
背中にあつた。

——「或る夜の幻想」

のように、身体感覚の異常をおもわせる表現がある。したがって、「ノート1924」を書いたころの中原は、異常体感が日常生活の場面でみられたというより、異常体感を思わせる夢をしばしば見た、と考えた方がよいかもしれない。ちなみに、志賀直哉の「暗夜行路」の最後の章に、前述の中原の「足」をえがいた詩とよく似た状況を夢にみるといふシーンがあるので紹介しておく。

謙作は半分覚めながら夢を見ていた。それは自分の足が二本共、
体を離れ、足だけで、勝手にその辺を無闇に歩き廻り、うるさくて
堪らない。

この状況は「俺は、俺の脚だけはなして／脚だけ歩くのをみてみよう
——」というのと大変良く似ている。

中原の病跡について福島章⁽⁸⁾は「彼は生涯に二度、短いあいだ妄想状態におちいったことがあるが、三十歳で死ぬまで、分裂病とはつきり診断できるような精神の解体を示すことはなかった。」とのべている。(志賀直哉も分裂質ではあった⁽⁹⁾が、分裂病になったことはない。)したがって、ダダイスト時代の中原は、分裂病とはいえないであろう。しかし、軽度の体感の異常があり、そのような夢をよくみていたと推測することはできると思う。この時期の詩は、理解不能のものが多く、身体感覚を表現したものについては、体感の異常が反映されていると考えると説明がつくがある。例えば、前述の「自滅」の中に「お腹の皮がカシヤカシヤする」というのがある。「皮がカサカサする」というのであれば通常の皮膚感覚の表現であるが、「カシヤカシヤする」というといかにも音がするという感じである(未刊詩篇の「秋の愁嘆」の中に、「笑へば靱殻かしやかしや」という表現がある。傍点は中原)。これらのことから、「カサカサ」という通常の擬態語ではあらわせない皮膚感覚の異常を中原が感じていたことが推測される。

(三)

以上のように、十六歳から二十一歳ごろまでの時期を中心として、中原には体感の異常が疑われることがわかった。このことは、これまでダダの詩のわかりにくさの中に埋没して見えなかつたと思われる。さて、このような異常体感とまではいかないが、中原の特異な生理感覚とでもいべきものが、未刊詩篇と自選詩集を比較することによってあきらかになつてくる。表一から表五(未刊詩篇)と表六・表七(自選詩集)を比較すると、各時期の未刊詩篇(ただし、表二に示した一九二八年―一九二九年の場合は十五篇と少ないのでぞく)のすべてに出現しているが自選詩集には全く出現しない身体語があることがわかる。それは、「唾

液」^(唾)「唾」(および、その関連語の「涎」^(たれ))である。これらの言葉のはいた作品を、年代順に並べてみると次のようになる。

(古る摺れた)

古る摺れた

外国の絵端書――

唾液が余りに中性だ

(「ノート1924」)

(ツッケンドンに)

雀の声は何という生唾液^(生唾液)だ――

雨はまだ降るだらうか

インキ壺をのぞいてニブリ加減をみよう

(「ノート1924」。「ニブリ」の傍点は中原。)

(秋の日を歩み疲れて)

忍従の 君は黙せし

われはまた 叫びもしたら

川果の 灰に光りて

感興は 唾液に消さる

(「ノート1924」)

(孤児の肌^(はだ)に唾吐きかけて)

孤児の肌^(はだ)に唾吐きかけて、

あとで泣いたるわたくしは

滅法界の大馬鹿者で、

(「早大ノート」)

さまざまな人

打返した綿のやうななごやかな男
ミレーの絵をみて、涎を垂らしてゐました。
〔早大ノート〕

(汽笛が鳴つたので)

硝子の響きは、
大人の涎と縁がある。

〔早大ノート〕

夜明け

夜明けが来た。雀の声は生唾液なまつばきに似てゐた。

(一九三四・四・二二)

(なんにも書かなかつたら)

あ、われ、一日、鏡に、向ひ、
唾、吐いたれや、さつぱり、したよ。

唾、吐いたれあ、さつぱり、したよ。

何か、すまない、気持も、したが。

鏡、詐せよ、悪気は、ないぞ、
ちよいと、いたづら、してみたサア。

(一九三四・十二・二九)

僕が知る

僕には僕の狂氣がある

僕の狂氣は蒼ざめて硬くなる
かの馬の静脈などを想はせる

僕にも僕の狂氣がある

それは張子のやうに硬いがまた
張子のやうに破けはしない

それは不死身の弾力に充ち

それはひよつとしたなら乾匏ほしあひであるかも知れない
それを小刀で削つて薄つぺらにして
さて口に入れたつて唾液に反撓するかも知れない

唾液には混らぬものを

恰かも唾液に混るやうな恰好をして
ぐつと嚙み込まなければならぬのかも知れない

ぐつと嚙み込んで、扱それがどんな不協和音を奏でるか、僕が知る
(一九三五・一・九)

大島行葵丸にて

夜の船より僕唾吐いた

ポイ と音して唾とんでつた
瞬間浪間に唾白かつたが
ぢきに忽ち見えなくなつた

(一九三五・四・二四)

このうち、「僕が知る」は「文学界」の昭和十二年十二月号の中原中

也追悼特集に、遺作集のひとつとして掲載されたもの(小林秀雄選)なので、全文をのせておいた。他の作品は、該当する語の語の部分のみを示した。これらの作品はすべて草稿のままで、生前に公表されたものはひとつもない。(全集の未刊詩篇の中のいくつかは、生前に雑誌に発表されたものがあるが、「唾液」に関連した言葉のはいった作品はすべて未発表である。)

「唾液」というのは、人間の分泌物の中でも不思議な存在である。なぜならば、「いったん口の中から吐き出された唾液は、その直前まで自己のものでありながら、自己の身体を離れたとたん自己のものという性質を失って、自己でないもの、そしてもはや二度とのみ込まない汚ない他者性をもったものとしての相貌を帯びてくる⁽¹⁰⁾」からである。したがって、自分のはいった唾をしげしげとながめることは普通ではないが、(なんにも書かなかったから)」という作品では、作者は鏡にはいた唾をじつとながめているのである。鏡には自分の姿が写るから、これは自分に唾をはいっていることにもなる。このような行為によって、「さっぱりしたよ」という気持になるというのは、どういう感覚なのだろうか。さらに、「狐兎の肌^{はだ}に唾吐きかけて」というのもおぞましい。こんなことをするものは「滅法界の大馬鹿者」であるにちがいない。

ところで、中原は実際に人前で唾を吐く癖があった。彼と実際のあった作家の永井龍男は次のように書いている⁽¹¹⁾。「中原の評判はどこでも悪かった。友人はとにかく、その家族たちは、すべて彼を嫌悪した。どういふ生理からか、中原はしつこくツバを吐く癖があり、人前をはばかりずその場の灰皿なぞを用いた。それがまたお前たち俗人に接している」と、という風にとれる仕草にも見えた。」

おそらく中原は人前で唾を吐くという自分の癖を恥じていたのであろう。そのため、詩の中で「唾を吐く」と書くことによって、現実の生活で唾を吐くことを防ごうとしたのであろう。そして、このような嫌悪す

べき行為を表現した作品は公表することはしなかったのである。さらに、単に「唾液」という言葉があるだけの作品でも、「唾を吐く」ことを連想させるから、同じく公表することをはばかったと考えられる。そうすることによって、自分の「暗部」をさぐられるのを防いだのである。私はこのように推測する。(ついでに推測をたくましくすると、小林秀雄が中原の追悼号で遺稿の中から「唾液」という言葉の頻出する「僕が知る」を選んだのは、小林にはこの詩が中原という人間をよく表現していると思われるからではないか。この詩で、中原は自分の「狂気」と「唾液」の関連をのべているのである。)

(四)

中原が十六歳のときに高橋新吉の『ダダイスト新吉の詩』を読んで感^激し、ダダイストを自称するようになったことはよく知られている。ところで、中原は『ダダイスト新吉の詩』のどのようなところに感^激したのだろうか。それがダダの本質である言語破壊的な言葉の配列(一見、分裂病者の書いたものと似ている)にあったことはまちがいあるまい。北川透⁽¹²⁾は「中原中也と(ダダ)との出会いそのものが宿命的であった。なぜ、宿命的であるかといえば、中也の中の自己資質が(ダダ)を避けるすべをしらなかつたからである。」とのべている。この「中也の中の自己資質」とは中原が分裂質であったことと解釈される。この点で「宿命的」であつたと思うのであるが、『ダダイスト新吉の詩』にも、身体感覚についての特異な表現が非常に多いのである。そして、この中には「唾液」に関連したものがある。以下、その部分をぬき出してみることにする。(引用は、『定本高橋新吉全集』、立風書房、一九七二による。)

妾は凡ゆる金銀白銅白金を瞬間に唾液にして、了う磁石を持って来ま

したと彼女は言った。そして呪文と其の唱へ方を僕に教へた。

——「断言はダダイスト」

左半身は痙攣が起ると五分間位続くので、其の間丸で破損した扇風機の様に振動するのであった。首も左側に捻じ曲げられ、鼻柱は白い鼻骨が露はに飛び出て、眼はジャクロの様になり、口からは涎をダラダラ垂らすのであった。

——「しんD A 廉吉」

彼は巡查等が、腰掛けて休んでゐる、小使や薬缶をめぐけて、唾液とタンを吐きかけた。(中略)

彼はDの家へ行かないで、其のまゝ、社会館に帰った。

頭痛がして話しもならなかった。

ツバをのむと喉仏が泣く。

——「吐血」

便所へ踞む

隙き穴

蛇が止つてゐる

唾液を吐きかける

黄色い汁を 尻の方から出す

ブンとも ヒュンとも言はない

へたばりついてゐる

ベッベッくくとツバをハキかける

——「一九二一年集 34」

このような表現は、中原の未刊詩篇にみられるものとよく似ている。

彼は『ダダイスト新吉の詩』を読んで、自分の身体感覚と波長が合うこととびつくりしたのではないだろうか。吉田熙生⁽³⁾は『ダダイスト新吉の詩』には生理、性についての即物的な表現も多い。これはこの詩集

の大きな特徴であつて、放蕩の味を覚えたばかりの少年中原にとっては自己解放の一つの契機であつたらう。」とのべている。そのような要素もあつたかもしれないが、中原は自己の生理と符合するような身体感覚の表現をみて、ひそかにおののいたと考えられないだろうか。中原は高橋から影響されたのであるから、両者の詩がよく似ているのは当然である。しかし、その異常さの点においては高橋の詩の方がきわだつている。野村喬⁽⁴⁾によれば、高橋は生涯に三度分裂病の発病がみられるが、一度目は『ダダイスト新吉の詩』を出版したころであつたという。したがつて、両者の詩のちがいは、分裂病の発病がみられたもの(高橋)と、分裂病ではあるが発病までには致らなかつたもの(中原)のちがいとみてよいと思う。中原は高橋の詩の中に自己の「狂気」につながる部分が発見し、そのような表現をもちこんだ作品をひそかにつくることで、結果として精神の平衡を保つことができたのだと私は推測する。このように考えるのは、あまりにも心理学に偏した見方だろうか。

注

- (1) 吉竹博「中原中也の身体意識」高知大学学術研究報告第37卷(人文科学)、一九八八。
- (2) 吉竹博「中原中也の身体意識(2)」——「血」について」高知大学学術研究報告第37卷(人文科学)、一九八八。
- (3) 「足」の字をこのように並べる書き方は、高橋新吉『ダダイスト新吉の詩』の「一九二一年集51」を模倣したものと思われる。

赤煉瓦と赤貝と

それは鉋屑を背負つたプロレタリアの晩餐

擦火 擦火

擦火

擦火

挟めぬいか?

巨大な蟹の蛇行

蕃茄油が舗道に塗られた。

吸物の蓋をとれ。

この中の「擦火」という文字の並べ方に注目されたい。

- (4) 北川透『中原中也の世界』、紀伊国屋書店、一九六八。
- (5) 佐々木幹郎『中原中也』、筑摩書房、一九八八。
- (6) 吉松和哉「精神分裂病と身体体験——異常体感を中心に——」(村上靖彦編『分裂病の精神病理12』、弘文堂、一九八三、所収)
- (7) 小波蔵安勝「異常体験を主徴とする青春期分裂性精神病の臨床的研究」、精神神経学雑誌、八〇巻一号、一九七八。
- (8) 福島章『天才——創造のバトグラフィー』、講談社、一九八四。
- (9) 入谷敏男『ことばの心理学』、中央公論社、一九六五。
- (10) 吉松和哉、前掲論文。
- (11) 永井龍男『中原中也』(『文芸読本・中原中也』、河出書房新社、一九七六、所収)
- (12) 北川透「(タダ)の視角——『ダイスト新吉の詩』を中心に——」(『中原中也・わが展開』、国文社、一九七七、所収)
- (13) 吉田熙生『評伝中原中也』、東京書籍、一九七八。
- (14) 野村喬「高橋新吉」(『国文学・解釈と鑑賞』、第二十卷十四号、一九六一、所収)

(平成元年十月五日受理)

(平成元年十二月二十七日発行)